

『甘露の法宇雨』

神事

「神の子」なる人間の実相を現象世界に実現するのが人生の目的である。現象世界とは現界、幽界、靈界を通じて呼ぶ言葉である。人間の運命とは「神の子」なる人間の実相（因子）が現象界に投影する時、時間的空間的に展開するのに、おのずから一定の順序を追うて展開して行くようにだいたい定められているの言う。それはたとえば朝顔の種子の中にはすでに「花」の因子が包蔵されているが、それが現象界に「花」となつて完成するまでには、日光に逢い、湿氣に遇い、芽を出し、蔓を出し、蕾を生じ、ついに花を開くというように、だいたい一定の順序を追うて展開するがごときである。かくのごとく、神の子なる実相人間も、その投影を現象界に完成するにはだいたい一定の時間を要し、植物が日光に逢い、雨露に遇うがごとく、あるいは幸福に恵まれ、あるいは虐待と戦うことによって、ついに実相人間の現象界への投影を完成するのである。しかし、その投影が完成するには、その投影は「念波の集積」で成り立っているのであるし、人間は心の自由をもち、自由に実相の悟りによって念波を浄め得ますれば、迷いによって念波をいっそう汚すこともできるのであるから、現象世界に実相人間を顕現する過程（進化の過程）を心次第で縮めることも長くすることもできるのである。靈魂進化の

過程を短縮するのは念の浄化による。念の浄化には、実相を悟ることが第一であり、物質欲に捉われざることが第二である。物質欲に捉われざるためには「物質本来無し」の真理を悟るが第一である。「物質本来無し」の真理を悟る程度に達せざる者には、物質の快に捉われざるための修行としてみずから進んで苦を求めて喜ぶか、物質に快を求めてかえって苦を得る体験を通じて、ついに物質欲に捉われざるに到るかの二途しかない。前者はみずから進んで嘗める苦行であり、後者は幸福を求ひれども求むれども運命的に他動的にやってくる苦難である。その他に過去の悪業の自壊する過程として自己の靈的流動体起こる擾乱現象の苦痛もある。苦難がみだりに取り去られず、多くの靈魂の靈界通信が苦行の価値を力説しているのもこのいろいろの理由によるのである。

第二章 物質と実在と

わたしはさきほど「物質」を説明して永遠の世界——実相の世界の上に現われる波であると申しました。波は捉えようとすれば常にその姿は変わっている。ここにあると思っていると次の瞬間にはもうその姿のないのが波であり、迷いの世界であります。実在とは永遠不滅の存在である。死滅してしまったり、消えたりする存在ではありません。永遠生きとしの世界である。実在は病まず、老いず、死せず、この真理を知ることが道を知ると言うのです。実在は宇宙に満ちて欠けざるがゆえに道と言うのです。道とは宇宙に充ち満ちている生命であります。「道は神と俱にあり、神こそ道なり、実在なり」道は神と俱である。宇宙に満ちて、宇宙と俱なる実相、

これがすなわち道であります。実相は神であり、神が道であり、道がすなわち実相である。これは皆同じことであります。

ここに最も大切なことがある。宇宙に満ちている大生命（実相）は実在であると同時に「自分」であるということであり、自分の実相はやはり実在であって、宇宙に遍満する道——すなわち神と同じものであることを知らなければならぬのであります。この「実在」ということを世間では抽象的にむずかしく考えて、哲学的な言葉をもって象牙の塔の奥深くにおしこめてしまい、われわれの生命とはなんの関係もない哲学上の思惟上の概念ぐらいいにしまっていたから、今まで、仏教などで相当高遠な真理が説かれていたにかかわらず、その高遠な真理も実生活に生きてこなかったのであります。ところが「実在」とはたんなる思惟上の概念ではない。

実在とは存在するもののいっさいである。あるものはただ実在だけだ。実在のほか何ものもない。実在、すなわち神こそすべてのすべてである。もし、われここにありとせば、それがある以上、それは神であり、実在である。その実在が、その神が、自分なのだ。この五尺の身体、いろいろの欠陥があり、やがて朽ち滅びてしまふところの肉体は実在なのではない。それが滅びるのは本来存在しないところの念波の投影にすぎないからだ。これを自分自身だと思つてはいけない。ここにこうして坐っている自分の念波の投影であつて、われわれの本質は久遠の実在なのだ。宇宙に充ち満つる大生命と同一の我こそ自分である。（自己を指して）大生命ここにありと自覚する。（また、聴衆を指して）皆様自身のうちに大生命ここに在りと自覚する。自分が実在であり大生命であると自覚

することが必要なのであります。

自分は宇宙に充つる真理と同じものだ。自分の実質は久遠の仏と同じものだ。永遠の真理と一つのものだと悟ることが肝腎なのです。それなのに自分と実在すなわち神とを別々に離して、別物のように考えているから、どんな大宗教もたんなる哲学になつてしまつて実際に人を救う力がなくなつてしまふのであります。われは真理と一つのものである。実在と一つのものである。神と一つのものであるという実感が要するに現実世界を生かす根本であります。生長の家が仏教、キリスト教と神髄において、同じことを説いていながら仏教、キリスト教に現われない数多くの奇跡を現わしているというのも、そこなのであります。仏教、キリスト教で言っているのと同じ真理を、抽象的に説かないで、「実在のみある」という立場から、真理を実生活と遊離しないで、生きた人間の巾に持つてきて、我すなわち真理である。大生命である。と、真理と吾とをびつたり一つにかさねてしまつて、吾すなわち真理なりとの大自覚に入らせる。ここに生長の家が在来の宗教の真理と同じ真理を説きながら、生活上に、治病上に實際の力ができてくるゆえんがあります。神が、神だけが、すべてのすべてである。実在すなわち実相だけがあるのです。それなのに妄想の迷いがあるとつてゐるから、実相の力が出てこないのです。迷いはない、実在だけが有る。実在すなわち我であるという自覚に立つた時、そこに不思議な實際生活上の活きた力が出てくるのであります。かく真理を生活上にそのまま生きるといふことが、道を知つて道を行なうことです。ただ知るだけではない。道とわが生命とがびつた

り一つになると、道を知っておのずから道を行なうことになって、ここに完全に知行合一ちぎょういついつが成るわけであります。

「実在を知り、実在に住るものは、消滅を超越して常住円相なり」と聖經にあります。ここにある「消滅」という字は、「生滅」ではありません。仏教で普通使う字は「生滅」という漢字ですが、ここにわざと「消滅」と書いてある。というのは要するに実在とは生きとおしの生命であって消えるなどということはない。それは本来「生」である。始め無き始めの久遠の昔から限り無く生きとおす生命である。現象的生とか滅とかはむろん超越している。不生不滅の奥にある本来生であって、生ばかりある。生々生々せいせいせいせいの実在であって消滅することなく生きとおす永遠不滅の大生命であって常に円満欠くることなき状態を持続している、常住円相の実在なのであります。

第四章 人間の真相および仮相

キリストは聖書の中に「吾は真理なり」と言っています。「吾は真理なり、吾によらで神の国に入るものなし」と言っている……。これを、キリスト教信者たちは「キリストという言葉にひければ救われるものがない」というキリストという言葉によらなかつた、さあ、なんでもかでも聖書をよんでキリストによらなければ、われわれは一生救われない、われわれを救って下さるものはキリストだけだ。阿弥陀では救われない、他の何宗でも救われない、どうでもキリスト教でなければならぬ、というふうに言いますが、それは違います。ひろんキ

リストを通さなければ、キリストによらなければわれわれは天国に入ることとはできない。それは本当です。けれどもこのキリストは「吾れは真理なり」と言ったその真理きりすとでなければならぬ。決して、二千年前にユダヤに生まれた肉体キリストのことではない。真理そのものであるキリスト「アブラハムの生まれぬ前さきより我はあるなり」と言った久遠生きとおしのキリストによらなければ天国に入ることとはできない。この真理きりすとによらなければ真相を悟ることはできないということがあります。キリストというのは真理しんりの、真相の神の応現でありますから、そのキリストがある時は観世音菩薩となり、また、ある時は生長の家の神様となって現われられるのです。ですからキリストによらなければ救われない、というのはすなわち真理によらなければ救われないということであって、何もキリスト教でなければならぬということではない。キリストも、釈迦も、弘法も、また各教祖もみなそれぞれの時代、それぞれの信仰の程度に従って応現した、一つの神の救いの天使なのでありますから、どの宗教も神髄はただ一つであって、神髄しんくわいさえ掴めばどれによらなければ救われないということはないのであります。

生命の真相 谷口雅春 日本教分社